

范陽の盧氏について

—— 盧植・盧毓と漢魏交代期の政治・文化 ——

高 橋 康 浩

はじめに

一 實踐の人

二 海内の大儒

三 純儒としての盧毓

四 人事の管掌と司馬氏

おわりに

はじめに

中國史において門閥貴族は魏晉南北朝から隋唐にかけて隆盛した。その中でも「范陽の盧氏」は、當時を代表する名族として知られる。范陽とは、現在の河北省定興の南西の固城鎮附近に當たる。愛宕元がすでに言及しているように、盧氏は西晉末から南宗と北宗に分かれ、北魏の時代に名望が形成され、その地位は孝文帝期の氏族詳定（氏族分定）により政治的に不動のものになった。^①その盧氏の淵源について、『新唐書』卷七十三上 宰相世系表三上には以下のように記されて

いる。⁽²⁾

盧氏は姜姓自り出づ。齊の文公の子の高、高の孫の侯は齊の正卿と爲り、諡して敬仲と曰ふ。采を盧に食^はみ、濟北の盧縣は是れなり。其の後因つて以て氏と爲す。田和齊を篡ふや、盧氏燕・秦の間に散居す。秦に博士の敖有り、子孫は涿水の上^{ほとり}に家し、遂に范陽涿の人と爲る。裔孫の植、字は子幹、漢の北中郎將たり。毓を生み、字は子象、魏の司空・容城成侯たり。三子あり、欽・簡・珽。欽は晉の尙書僕射たり。珽字は子笏、晉の侍中尙書・廣燕穆子たり。三子あり、浮・皓・志。志字は子道、晉の中書監・衛尉卿たり。三子あり、諡・謚・詵。諡字は子諒、晉の侍中・中書監たり。……。

この記述に基づけば、盧氏は西周時代の齊の文公から分かれた一族の出身で正卿を務めたという。侯という人物は、春秋時代、政變によって亡命していた桓公の歸國を受け入れた高侯その人に當たる。⁽³⁾ 盧を食邑としたことで盧氏を名乗り、子孫は戰國時代にかけて北方の黃河・渭水流域に散居した。時を経て秦代に博士となった盧敖の末裔が後漢で名を馳せた盧植ということになる。ちなみに古典文獻中、盧敖なる人物は、『淮南子』道應篇に見え、どうやら道術家であつたようである。⁽⁴⁾ ただし、この盧敖が本當に「范陽の盧氏」の祖先と言えるかは不明であり、『新唐書』の遠祖の記述をそのまま信ずることはできない。とすれば、盧植こそが、一族の名を高からしめ、まとまった記録の残る最古の盧氏の人物と言つてよい。

これまでに盧植を専論したものは、思想面から検討したものとして杉浦豊治・池田秀三・潘斌の研究があり、三者はいずれも著書『禮記解詁』の特徴を取りあげている。⁽⁵⁾ また、「范陽の盧氏」を論じたものとしては、註(1)所掲愛宕論文があり、これは唐代以降の婚姻關係の實態を通じて貴族制の變容を論じたものである。⁽⁶⁾ 盧植・盧毓を直接考察の對象とはしていないが、歴代の盧氏が盧植を遠祖と捉えていることに觸れており、盧氏にとつての盧植の存在の大きさを窺い得る。一方、盧毓については、専論したものは管見の限り見當たらないが、魏晉交代期における政治狀況との関わりの中で論じ

られるものは散見する。⁽⁷⁾ これらを踏まえた上で、本稿は「范陽の盧氏」の事実上の始祖として後漢後半期より擡頭した盧植と子の盧毓を取り上げる。名族へと變貌を遂げた盧氏一族の基盤となったものは果たして何なのか。漢魏交代期における知識人の生き方を通じて、政治・文化の諸相を整理するとともに、兩晉以降に確立する貴族制の形成過程に一つの視座を提供するものである。

一 實踐の人

後漢では、章帝期の白虎觀會議や今古文論争など、儒教經典の解釋を巡る對立が繰り廣げられた。また、鄉舉里選などの官僚登用制度も儒教の理念・價值觀に基づいており、儒教が名實ともに國家の齒車として組み込まれ、機能していた。しかし、歷代皇帝の短命が支配の不安定要素となり、和帝期以降、外戚と宦官の權力争いを惹起する。特に宦官の跋扈は「黨錮の禁」という形で二度の彈壓事件を引き起こし、恣意的な官僚排除は後漢の統治機構に徹底的な打撃を與える。かかる狀勢の中を生きたのが盧植であつた。まずはその生涯を追つてみたい。

盧植は、字を子幹といい、幽州涿郡涿縣の人である。八尺二寸（約一八九センチメートル）の長身と鐘のような聲の持ち主で、若くして大儒の馬融に仕え、學問に精勵した。『後漢書』列傳五十四 盧植傳は、修學時の生眞面目さを次のように記す。⁽⁸⁾

少くして鄭玄と俱に馬融に事へ、能く古今の學に通じ、研精を好んで章句を守らず。（馬）融は外戚の豪家にして、多く女倡を列ねて前に歌舞せしむ。（盧）植侍講すること年を積かさめるも、未だ嘗て轉眄せず。融是を以て之を敬ふ。學終りて辭歸し、門を闔とざして教授す。

馬皇后の一族であり、外戚として權勢を誇つていた馬融は多くの藝妓を並べて歌舞させていた。盧植は長年侍講していながら、それを一顧だにせず勉學に集中したのである。結果、師の馬融から敬意を表された。當時の馬融は四百餘人の門徒

を抱えており、その中で頭角を現した盧植の非凡さが窺えよう。

盧植の學問は今古文の別を問わぬだけでなく、「研精を好んで章句を守らず」という記述から分かるように、經典の意義を極めることを好み、一字一句の解釋に拘らぬものであった。⁽¹⁰⁾ かかる傾向は盧植だけでなく、すでに桓譚・班固・王充にも見られる。⁽¹¹⁾ 「性は剛毅にして大節あり、常に濟世の志を懷」(『後漢書』列傳五十四 盧植傳) いていた盧植は、訓詁に拘泥して文字に埋没するよりも、經典内容の實踐を重視する人物と言える。ちなみに、のちに後漢最高の儒者と評される鄭玄は同門であったが、生涯のほとんどを官職に就かぬまま送った鄭玄とは極めて對照的であった。

史書にすら記される盧植の剛毅さは布衣の頃より發揮された。靈帝期、外戚として權勢を振るっていた竇武に對して盧植は文書を獻じて諫める。『後漢書』列傳五十四 盧植傳に、⁽¹²⁾

(盧) 植 聞くならず、①嫠に緯を恤へざるの事有り、漆室に楹に倚るの戚ひ有りと。②憂ひ深く思ひ遠きは、君子の情なり。③夫れ士は爭友を立て、④義は切磋を貴ぶ。⑤書に『謀りて庶人と及にす』と陳べ、⑥詩に『芻蕘に詢る』と詠ず。植 先王の書を誦すること久しく、敢て其の誓言を愛しまんや。今、足下の漢朝に於けるや、猶ほ旦・奭の周室に在るがごとく、聖主を建立し、四海繋ること有り。論者以爲へらく、吾子の功は、斯に於て重しと爲すと。天下は目を聚めて視、耳を擧めて聽き、之を前事に準ふるに、將に景風の祚ひ有らんとすと謂ふ。⑦春秋の義を尋ぬるに、王后に嗣無ければ、擇びて親長を立て、年均しければ德を以てし、德均しければ則ち之を卜筮に決すと。今、同宗 相ひ後き、圖を披き牒を案じ、次を以て之を建つ。何の勳か之れ有らん。⑧豈に 横に天の功を叨りて以て己が力と爲さんや。宜しく大賞を辭して、以て身名を全うすべし。又た 比、世祚は競からず、仍りに外に嗣を求め、危ふしと謂ふ可し。而も四方未だ寧からず、盜賊は隙を伺ひ、恆獄・勃碣は、特に姦盜多く、⑨將に楚人の比を脅し、⑩尹氏の朝を立つるの變有らんとす。宜しく古禮に依りて、諸子の官を置き、王侯の愛子、宗室の賢才を徴し、外は訓道の義を崇んにし、内は貪利の心を息め、其の良能を簡び、用に隨ひて之を爵すべし。幹を彊く

し枝を弱くするの道なり。

とある。この獻書は儒教經典からの引用を多く含んでおり、①『春秋左氏傳』昭公二十四年、②『詩經』序、③『孝經』諫諍章、④『詩經』衛風 淇奥篇、⑤『尚書』洪範篇、⑥『詩經』大雅 板篇、⑦『春秋左氏傳』昭公二十六年、⑧『春秋左氏傳』僖公二十四年、⑨『春秋左氏傳』昭公十三年、⑩『春秋左氏傳』昭公二十三年などを典據としつつ、帝室の強化を重視する「彊幹弱枝」の道を竇武に説いた。¹⁴ 盧植の儒者としての學知が發揮された文章と言つてよい。結局、竇武には聞き入れられなかったものの、盧植は無位無冠の身ながら、權勢相手でも構わず直言を呈していく。その態度が評價されたのであろう。以後、州郡から幾度も招聘を受けるが、いずれにも應じなかった。建寧年間（一六八―一七二）になつてようやく徵召に應じて博士となり、起家する。

熹平四（一七五）年、九江の蠻が叛亂を起こすと、四府（三公と大將軍）は盧植の文武の才を認めて九江太守に任じ、その平定を命じた。郡太守という高級官僚になつた後、前評判に違わず蠻を服従せしめたが、病を得て官を辭した。すると今度は南夷の叛亂が勃發したため、盧江太守に任じられた。盧植は單なる儒者ではなく、軍事的手腕を備えた有爲の人材として活躍する。そして、將としての名を揚げたのが黃巾の亂であつた。

光和七（一八四）年（中平元年）、太平道の敎祖張角が信徒を煽動して亂を起こすと、盧植はまたも四府から推舉され、黃巾討伐を行った。主力軍を率いて聯戰聯勝を續けたが、思わぬ形で足を取られしもう。『後漢書』列傳五十四 盧植傳に、¹⁵
 中平元年、黃巾賊起こるや、四府は（盧）植を舉ぐ。北中郎將・持節を拜し、護烏桓中郎將の宗員を以て副とし、北軍五校の士を將ゐ、天下の諸郡の兵を發して之を征す。連戰して賊帥の張角を破り、斬獲すること萬餘人。角ら走れて廣宗に保つ。植 圍を築き塹を鑿ち、雲梯を造作し、當に之を抜くに垂んとす。^{なんな} 帝 小黃門の左豐を遣はして軍に詣りて賊の形勢を觀はしむ。^{うかが} 或るひと植に賂を以て豐に送らんことを勸むるも、植 肯ぜず。豐 還りて帝に言ひて曰く、「廣宗の賊は破り易き耳。盧中郎は壘を固くし軍を息め、以て天の誅せんことを待つ」と。帝 怒り、遂に檻車

もて植を徴し、死罪一等を減ず。

とある。靈帝の命を受けて視察に來た宦官の左豐に對し、ある者が贈賄するよう進言した。しかし、剛毅な性格の彼が首肯するはずもない。そのため、左豐に讒言されて靈帝の怒りを買ひ、檻車に入れられ、ようやく死罪一等を減じられたのである。この時は、黃巾討伐に功績を挙げた車騎將軍の皇甫嵩が盧植の方略を稱賛したため、同年に復歸することができた。とはいえ、かかる體驗は宦官を嫌惡するのに充分であつたろう。五年後、盧植は何進と袁紹が企てた宦官掃討に参加し、張讓・段珪らを追ひ詰めている（『後漢書』列傳五十九 何進傳¹⁶）。なお、この宦官征討計劃の際、何進が并州牧の董卓を召すことに盧植は強く反對した。また政變後、董卓が少帝の廢位を提案すると、これに敢然と反對意見を表明する。董卓は盧植に害意を抱いたが、議郎の彭伯が制止した。

又た議郎の彭伯（董）卓を諫めて曰く、「盧尚書は海内の大儒にして、人の望なり。今、先に之を害せば、天下は震怖せん」と。卓乃ち止め、但だ植の官を免する而已（『後漢書』列傳五十四 盧植傳¹⁷）。

盧植は「海内の大儒」であり、彼を亡き者にすれば天下が震恐するとまで言わしめたのである。その名聲の高さを理解できよう。漢代に著名な祖先を輩出した家柄でもない盧氏が、一代で天下に名だたる人士となり得たのである。知識人層からの反撥を怖れた董卓は彭伯の言に従ひ、盧植の殺害をあきらめて免官にとどめた。しかし、身の危険を察した盧植は上谷に隱棲する。

盧植は黃巾の亂を鎮壓し、國家を歪めた宦官を討ち、董卓の專横に抵抗するなど、漢のために忠を盡くした生涯と言つてよい。それが袁紹に高く評價される。袁紹は「四世三公」と稱された名門であり、家學として『孟氏易』を修める「汝南の袁氏」の出身である。しかも、かかる出自にありながらよく士に遜つたため、人が自然に集まつたという（『三國志』卷六 袁紹傳¹⁸）。

初平三（一九二年）、盧植は袁紹に軍師として招かれた。袁紹が招聘した理由は、盧植の將としての能力もさることな

がら、名聲を有する知識人としての部分に期待した點が大きいであろう。當時、袁紹は華北における霸權の確立を企圖していた。そこに立ちはだかったのが公孫瓚である。だが、公孫瓚は知識人層との折り合いが悪く、そこに袁紹の附け入る隙があった。

（公孫瓚 内外を統ぶるに、衣冠の子弟の材秀有る者は、必ず抑へて窮苦の地に困在せしむ。或るひと其の故を問ふ。答へて曰く、「今、衣冠の家の子弟及び善士を取りて之を富貴にせば、皆な自ら以て職當に之を得べしと爲し、人の善を謝せざるなり」と（三國志）卷八 公孫瓚傳注引『英雄記』⁽¹⁹⁾）

公孫瓚は名望家の子弟らを嫌惡して重用しなかった。その理由として、彼らを取りたててやったところで、自らの力でその地位に就いたものと捉えて感謝しないことを擧げている。かかる経緯があればこそ、華北の幽州を本貫とし、四府に才を認められ、天下に名聲を有する盧植を自陣營に迎えることは、華北の知識人層を味方につける上で非常に有効な手立てとなろう。また、何よりも盧植は公孫瓚の師に當たる（三國志）卷八 公孫瓚傳⁽²⁰⁾。とすれば、公孫瓚を牽制すること上ない切り札となるのである。あくまでも實踐を重ねる盧植は、免官・隱棲という憂き目に遭いながらも挫けず、袁紹の招きに應じた。しかし、程なく病死したため、袁紹のもとで活躍する機會はほとんどなかった。政治・軍事・學問等々、あらゆる分野に通じた盧植の死は、袁紹にとって衝撃であつたろう。もっと長生きしていれば、曹操の擡頭を防げたかも知れない。

このように、盧植は權勢を恐れぬ剛直さを持ち、また儒教を以て名を知られ、持ち合わせた將才を發揮して、後漢後半期に頭角を現していく。それはやがて、董卓にはばかられ、四世三公の袁紹にすら一目置かれるほどの存在感を示すに至った。學問を机上のものとせず、政治・軍事での實踐を重視する姿勢こそが盧植の特徴と言える。これは、在野にて經典注釋に意を注いだ同門の鄭玄とは對照的であつた。

二 海内の大儒

「海内の大儒」とまで稱された盧植の學術面の經歷をたどってみると、馬融のもとで儒家的教養を磨いたことをはじめ、郷里の幽州で學舎を開き、門弟に講授して後進の育成に當たり、儒教經典の注釋を著している。さらに熹平年間には、石經（いわゆる熹平石經）の設立にも關與した。一聯の實績は、盧植が漢代屈指の知識人であることを示す證左である。かかる活動の中で、儒者としての學知を披露したものが『禮記解詁』であつた。盧植は解詁執筆の動機を、熹平石經建立時の上奏文中で開陳している。

臣 少くして通儒たる故の南郡太守の馬融に従ひて古學を受け、頗る今の禮記の特に同穴多きを知る。臣前に周禮の諸經を以て、批謬を發起し、敢て愚淺に率ゐて、之が解詁を爲る。而れども家乏しく、供繕寫上するに力無し。……

（『後漢書』列傳五十四 盧植傳）⁽²¹⁾

當時の『禮記』が回りくどかつたため、『周禮』の諸經を用いてその誤りを示した上で、自らの解釋を提示したという。『禮記解詁』は完存しておらず、今日その全貌を知ることができない。しかし、斷篇的に残る部分から、注釋の傾向を伺うことができる。⁽²²⁾

『禮記解詁』に關しては冒頭で述べた先行研究に詳しいため、改めて筆者が贅言を費やすまでもないが、とりわけ註（5）所掲池田論文が精緻な検討を加えている。それによれば、盧植『禮記解詁』は、經文記載の事物や動作を具體的に解釋する、實務型の注釋であることを第一の特徴とし、鄭玄注を精神主義的注釋と述べるのに對して、盧植注を實踐的效用にも配慮したものだという。そして第二の特徴として、注中に他の經典を引用し、禮學をさらには經學全體を統一し體系づける、體系的な注釋であるとする。盧植傳の「周禮の諸經を以て、批謬を發起し、敢て愚淺に率ゐて、之が解詁を爲る」という文言からは、確かに盧植が『周禮』を中心とした經學體系の構築を企圖していたことが窺えよう。また池田は、

かかる差異が、政治に關わり續けた盧植と生涯政治に關わらなかった鄭玄という兩者の立場に起因することも合わせて指摘している。すなわち、經義の理解とその實踐を尊ぶのが盧植の態度であつた。⁽²³⁾

如上の特徴を有する盧植の『禮記解詁』は、經典内容の分かりやすさを追求した點では秀逸なものと言える。今日、『禮記』注といえは鄭玄注を指す。鄭玄は『禮記』をはじめ、あまねく經典に注釋を著し、『周禮』『儀禮』『禮記』の三禮を有機的に結びつけた。一方で、その經典解釋は「辭訓に質にして、通人は頗る其の繁なるを譏」つた（『後漢書』列傳二十五 鄭玄傳）ように、詳細ながらも、他者からの批判を招くほど非常に煩雜なものであつたことが理解できる。つまり、分かりやすさおよび實踐性という觀點では盧植注に劣るものであつた。換言すれば、經典讀解のための便宜を圖り、實踐的解釋を打ち出したからこそ、盧植注は實踐を重んじる後漢末の風潮に合致し、ついには「大儒」として名を馳せたのであるまいか。

いずれにせよ、同門として、後漢を代表する儒者として、今日ともに名を残す盧植と鄭玄であつたが、當時における兩者の名聲にいささか差があつたことが窺える。それは袁紹に招聘された際のことである。前述のとおり、盧植は招かれてから程なくして亡くなつたため、袁紹のもとでの活躍はほとんどない。だがその後、袁紹は鄭玄を招く。これは盧植と同じように軍師としての働きに期待したのであろう。『後漢書』列傳二十五 鄭玄傳に、⁽²⁴⁾

時に大將軍の袁紹、兵を冀州に總べ、使を遣はして（鄭）玄を要^{ひか}へしむ。大いに賓客に會し、玄最も後に至るや、乃ち延^{まね}きて上坐に升らしむ。身長八尺、酒を飲むこと一斛、秀眉明目にして、容儀溫偉なり。紹の客に豪俊多く、竝びに才說有り。玄の儒者なるを見て、未だ通人を以て之を許さず、競ひて異端を設け、百家互いに起くる。玄は方に依りて辯對し、咸な問ひの表に出づ。皆な未だ聞かざる所を得、嗟服せざるは莫し。

とある。上座に招かれた鄭玄が酒を飲んでいたところ、袁紹の客たちから「通人」、すなわち經義に通じた博覽多識の學者と見られず輕視され、次々に異說を投げかけられた。それに對し、鄭玄は相手の出方に應じて豫想もせぬ答えを返す。

直接問答を交わしたことで、豪俊たちはようやく鄭玄を認めたのである。この時の袁紹は鄭玄に敬意を表したが、のちに強壓的な態度に出る。

（建安）五年春、孔子を夢みる。之に告げて曰く、「起きよ、起きよ、今年歳は辰に在り、來年歳は巳に在り」と。既に寤むるや、讖を以て之に合し、命の當に終はるべきを知り、頃く有りて疾に寝ぬ。時に袁紹は曹操と官度に相ひ拒ぎ、其の子の譚をして使を遣はして玄に逼りて軍に隨はしむ。已むを得ず、病を載せて元城縣に到るも、疾篤くして進まず、其の年の六月に卒す（『後漢書』列傳二十五 鄭玄傳⁽²⁵⁾）。

建安五（二〇〇）年、官渡の戦いで曹操と對峙していた袁紹は、知識人層を味方につける腹づもりだったのである。子の袁譚に命じて病臥にある鄭玄を強制的に呼び寄せる。鄭玄は無理を押して向かうも道中で重篤となり、そのまま歿した。つまり、袁紹の強要が鄭玄の命を削ってしまったのである。喫緊の状況があったことを差し引いても、ぞんざいな遇し方と言うほかない。

鄭玄が生涯に著した經典注釋は、質・量ともに後漢の最高ランクと言つてよい。就中、三禮注と『毛詩』鄭箋は出色のできを誇り、『周禮』を中心に精緻に組み立てられた經學體系は壓卷である。學者としてのレベルは盧植を凌駕しよう。しかし、このような評價は後世に確立したものである。上述のごとく、後漢末當時は「通人」として見られず、敬意を表されぬ扱いをされたように、その名聲は「海内の大儒」とまで評された盧植に及ばなかったのである。⁽²⁷⁾

かかる名聲の差が子孫にも影響したのであろうか。繰り返すように、盧植の子孫は「范陽の盧氏」という貴族へ成長していく。しかし、鄭玄の子孫が貴族になることはなかった。鄭玄唯一の子の益恩は、黄巾の亂に遭遇した孔融を助けに向かい落命している（『後漢書』列傳二十五 鄭玄傳）。益恩には小同という遺腹の子がおり、曹魏に仕えて侍中・關内侯となった。しかし、『三國志』卷四 高貴郷公紀注引『魏氏春秋』⁽²⁸⁾に、

小同 司馬文王に詣る。文王に密疏有り、未だ之を屏けざるなり。廁に如きて還り、之に謂ひて曰く、「卿は吾が疏

を見しや」と。對へて曰く、「否」と。文王猶ほ疑ひて之を鳩し、卒す。

とあるように、曹魏政權末期、司馬文王（司馬昭）がしたためていた内密の上疏の件で詰問され、殺害されてしまったのである。當時、司馬氏は曹魏帝室相手に長らく血塗られた權力闘争を展開していた。司馬昭は高貴郷公曹髦を、兄司馬師は夏侯玄・李豊らを、父司馬懿は曹爽兄弟や何晏らを殺害したように、皇帝・皇族や彼らの與黨を肅清してきたのである。とはいえ、司馬氏は敵對勢力に屬する者を手当たり次第に殺したわけではない。例えば、曹爽の司馬を務め、司馬懿が曹爽誅殺の兵を起こした際にわずかな手勢でその包圍を突破した魯芝は、曹魏帝室と懇意な關係にありながらも肅清されず、卻つて司馬氏から評價されて登用され、西晉が建國された後も要職を務めている。⁽²⁰⁾しかし、鄭玄の孫の小同は司馬昭に殺された。かつて權勢を誇った董卓は盧植を殺害しかけたが、輿論の反撥を恐れて躊躇している。⁽³⁰⁾鄭玄の子孫は司馬氏にとって、殺害を躊躇したり、輿論の反撥を氣にするような存在ではなかったのである。自らの高い名聲によって命を繋ぎ、子孫が名族として隆盛していく盧植と、唯一の忘れ形見であつた孫が殺害される鄭玄。兩者は極めて對照的と言えよう。

話を盧植に戻す。海内に轟く聲望を得た盧植は初平三（一九二）年に亡くなったが、その死後も尊崇された。『三國志』卷二十二 盧毓傳注引『續漢書』に、⁽³¹⁾

太祖 北のかた柳城を征し、涿郡を過ぐるや、太守に告げしめて曰く、「故の北中郎將の盧植、名は海内に著れ、學は儒宗と爲り、士の楷模、乃ち國の楨幹なり。昔、武王の殷に入るや、商容の閭を封し、鄭は子産を喪ひて仲尼は涕を隕す。孤が此の州に到り、其餘風を嘉す。春秋の義に、『賢者の後は、人に異なること有り』と。敬しんで丞掾を遣はして墳墓を脩め、并せて薄醢を致し、以て厥の德を彰せ」と。

とある。太祖こと魏の武帝曹操もまた、盧植を海内に名の知られた儒宗であると評價した。曹操が柳城を攻略したのは建安十二（二〇七）年のことであり、この時は袁氏の殘黨および烏桓を討伐している。建安五（二〇〇）年の官渡の戦い以降、盧植を軍師に招いた袁紹陣營は急激に衰退し、やがて華北は曹操の手に落ちる。盧植は、生きていれば敵として戦っ

たかも知れぬ曹操からも顯彰されたのである。⁽³²⁾

本章を整理すると、盧植と鄭玄はともに後漢を代表する儒者でありながらも、その評價には開きがあったことが分かる。盧植は『禮記解詁』を著し、煩瑣な鄭玄の『禮記』注よりも經典解釋の分かりやすさと實踐性という觀點で勝っていた。さらに、「海内の大儒」と稱され、當時の名聲のレベルという点でも鄭玄を凌いだのである。この差は、盧植の子孫が魏晉期を生き延び、鄭玄の子孫が司馬氏に殺害されるという形で現れており、のちにまで影響を及ぼしたのである。

三 純儒としての盧毓

『三國志』卷二十二盧毓傳によれば、盧植が歿した時、末子の盧毓はわずか十歳であったという。したがって、生年は黃巾の亂の前年に當たる中平六（一八三）年となる。故郷は動亂に遭遇し、二人の兄はその中で落命した。袁紹と公孫瓚の霸權争いが起こると、幽州・冀州は食糧不足に見舞われたが、盧毓は兄嫁と兄の子を養い評判を得る。弱冠を迎える頃には、父が輔けた後漢も袁氏も滅亡に瀕していた。袁紹は官渡の戦いで曹操に敗れ、失意の中で後繼者を定めず歿した。子の袁熙と袁尚の間で兄弟争いが起こると、曹操はそれに乗じて袁氏を滅ぼし、華北四州を支配下に収めるとともに、華北の知識人層、いわゆる「北海グループ」を麾下に加えたのである。⁽³³⁾「北海グループ」は、盧植の友人かつ同門であった鄭玄と、鄭玄を評價した孔融を中心とする知識人集團であった。建安十六（二二一）年、盧毓は曹丕の招請を受けて曹魏に仕え、と、「北海グループ」に屬する崔琰から推薦を受けた。したがって、盧毓自身も「北海グループ」に屬すると考えてよい。崔琰からの評價は極めて高いものであった。『三國志』卷十二崔琰傳に、⁽³⁴⁾

涿郡の孫禮・盧毓 始めて軍府に入るや、（崔）琰 又た之を名じて曰く、「孫は疏亮亢烈、剛簡にして能く斷ず。盧は清警明理、百鍊して消けず。皆な公才なり」と。

とあるように、同郷の孫禮とともに三公に堪える才能の持ち主と認められた。この推薦を受けて冀州の主簿となり、以後、

崔琰の評價に違うことなく曹魏政権で着實に能力を發揮する。なお、崔琰は曹操の丞相府で人事を任されるなど、政權内で極めて重要な位置を占めていた。³⁵ ちなみに、盧毓が與することとなる司馬懿を最初に評價したのも崔琰であった。

盧毓と司馬懿の交流がいつ始まったのか詳細は不明である。もともと司馬氏は、後漢中期の司馬鈞（左馮翊）・司馬量（豫章太守）・司馬儁（潁川太守）・司馬防（京兆尹）と、數世代にわたって高級官僚を輩出し、また儒教を修めてきた河内郡の名族である。³⁶ 若い頃の司馬懿は、同郡の楊俊から「非常の器」と評價され、また兄の司馬朗を通じて崔琰の評價を受けている（『晉書』卷一 宣帝紀³⁷）。つまり盧毓と司馬懿は、崔琰という共通の評價者があり、儒教という共通の文化的價值を根底に持っているのである。おそらく兩者の交友は政權初從時よりすでに始まっていたのであろう。

しかし、盧毓が初從した頃の曹魏は、赤壁の敗戦からの立て直しを圖りつつ、漢魏革命の準備を整えていた時期に當たる。その過程で曹操は子の曹丕・曹植とともに積極的に文學を宣揚した。かかる文學の興隆について、岡村繁は、曹氏が支配者として知識人のうゑに君臨するための卓越化という點に理由を求める。卑賤な家柄出身の曹魏君主が、配下の官僚貴族に對して威容を保ち續けるために、彼らを凌駕する學問・文學を身につける必要性があつたと述べる。³⁸ 一方、渡邊義浩は、儒教を價值觀の根底に置く「名士」層に對抗するために、曹氏が文學を新たな價值觀に据えたと捉える。併せて、「文學」を冠する官職が設置されるなど、文化的にも制度的にも文學隆盛の狀況が整えられたという。³⁹ いずれにせよ、文學は曹魏における重要な文化的價值として、三曹主導のもとに隆盛した。これが今日「建安文學」と呼ばれるものである。⁴⁰ ほぼ時を同じくして、曹操は儒教官僚たちを次々と彈壓する。建安十三（二〇八）年には孔子の末裔の孔融が、同十七（二二二）年には政權を初期から支えてきた謀臣の荀彧が、同二十一（二一六）年には盧毓を推舉してくれた崔琰が殺害される。曹操は漢魏革命を目論んで君主權力を固めていく中で、「唯才主義」を掲げて新たな人事基準を示し、漢代的價值觀たる儒教の軀からの脱卻を圖っていた。荀彧たちは言わば見せしめとなつたのである。⁴¹

かかる狀態は、必然的に文學者の登場を促した。吳質などはその典型である。吳質は著名な祖先を持たぬ單家出身のう

え、漢代の傳統的名教たる儒教を價值の第一に置かなかつた。しかし、史書に記されるほどの文才を持ち、曹丕に重んじられた。それだけでなく、陳羣・司馬懿・朱鑠とともに「太子四友」となり、ついには列侯に封ぜられるに至る（『三國志』卷二十一 王綏傳附吳質傳・『晉書』卷一 宣帝紀）。つまり、文學の才能で成り上がった存在と言えよう。⁽⁴²⁾ 吳質だけでなく、王綏・阮瑀ら建安七子に代表されるように、儒教一尊の價值基準の中で生きてきた後漢末の儒者たちもまた相互に文學作品を應酬した。

これに對して、今日、盧毓の文學作品は残っていない。そもそも父の盧植が辭賦を好まず、生涯に碑・誄・表・記およそ六篇を著しただけであつた。子の盧毓もそれに倣つたのであろうか。文學活動の隆盛という文化的潮流の眞つ只中にあるながら、特に詩や賦を著すわけでもなく、ひたすら儒者であり續ける。その一例が、冀州主簿時代に曹操に呈した獻書であつた。『三國志』卷二十一 盧毓傳に、⁽⁴³⁾

時に天下草創し、逋逃多し。故に士亡の法を重くし、罪は妻子に及ぶ。亡士の妻の白ら、始めて夫の家に適くこと數日、未だ夫と相ひ見えず、大理は棄市を奏す。毓之を駁して曰く、「夫れ女子の情は、接見を以て恩生じ、婦と成りて義重し。①故に詩に云ふ、『未だ君子を見ざれば、我が心傷み悲しむ。亦た既に見、我が心則ち夷らぐ』と。②又た禮に、『未だ廟見せざるの婦にして死し、歸りて女氏の黨に葬らせ、未だ婦と成さざるを以てするなり』と。今、白らは生きては未見の悲しみ有り、死しては非婦の痛み有り。而れども吏議は之を大辟に肆せんと欲す。則ち若し同牢合卺の後、罪何の加ふる所なるや。③且つ記に曰く、『附して輕きに從ふ』とは、人の罪を附するに、輕きを以て比と爲すを言ふ。④又た書に云はく、『其の不幸を殺さん與は、寧ろ不經に失せよ』とは、重きに過つを恐るればなり。苟めに以ふに白らは皆な禮聘を受け、已に門庭に入り、之を刑するを可と爲し、之を殺すを重しと爲す」と。太祖曰く、「毓之を執ることは是なり。又た經典を引きて意有り、孤をして歎息せしむ」と。是れに由り丞相法曹議令史と爲り、西曹議令史に轉ず。

とある。天下の草創期、逃亡する兵士が多く現れた。曹操はこれに對處するために法を改定し、逃亡兵の妻子にまで累が及ぶよう刑罰を重くする。盧毓はこのやり方を批判するため、かつて父が寶武に呈した獻書のごとく、①『詩經』召南草蟲篇、②『禮記』曾子問篇、③『禮記』王制篇、④『春秋左氏傳』襄公二十六年などの儒教經典を引用して、政策の轉換を主張した。曹操はこの書に感歎し、盧毓の獻策を是としたのである。

前述したように、曹操は孔融・荀彧・崔琰のような名族出身の儒教官僚を彈壓するなど、かつて自らが高く評價した者ですら容赦しなかった。それを考えれば、大儒盧植の子であり、自らも儒を以て鳴る盧毓は、「儒」の象徴として彈壓の對象になってもおかしくはない。しかし、儒教經典を引用した獻書により卻つて曹操をうならせ、政治に反映させ得たのである。盧毓の學知が机上のものでないことが理解できよう。

また、盧毓の志向する儒教的徳治は、儒教一尊の漢が滅亡した後にも見られた。文帝期、彼は複数の太守職を歴任するが、その時の治政を史書は次のように記す。

魏國既に建つや、吏部郎と爲る。文帝踐阼するや、黃門侍郎に徙り、出でて濟陰相・梁・譙二郡太守と爲る。帝譙は舊鄉なるを以ての故に、大いに民を徙して之を充たし、以て屯田を爲さしむ。而れども譙は土地瘠瘠にして、百姓窮困す。毓之を愍れみ、上表して民を梁國に徙して沃衍に就かしめ、帝の意を失す。毓の表する所を聽すと雖も、心に猶ほ之を恨む。遂に毓を左遷し、徙民を將ゐしめて、睢陽の典農校尉と爲す。毓の心は民を利することに在り、躬自ら臨視し、美田に擇居せしむ。百姓之を賴る。安平・廣平太守に遷り、所在に惠化有り(『三國志』卷二十二盧毓傳)。(4)

盧毓は各地で農業を重視し、恩恵を施し、教化に務めている。人民の困窮を救うため、帝の意に反しても肥沃な田土を彼らに提供した。父盧植が「常に濟世の志」を懷いていたように、盧毓もまた儒教的價值觀に基づく政治を實踐した。曹操への獻書といい、太守時代の治政といい、純儒としての生き方を貫いたのである。

君主相手でもひるむことなく直諫を呈する盧毓は、明帝期に入って地方での一聯の治績が評價され、中央に戻り侍中となった。明帝は「奢靡」の皇帝とされる。特に宮殿造営に關しては多くの批判を招き、『三國志』の著者陳壽も、秦の始皇帝や前漢の武帝の轍を踏む重大な失敗であると評している。⁽⁴⁶⁾青龍二（二三四）年、曹魏への北伐を指揮していた諸葛亮が陣歿し、蜀漢の脅威が消えたことで、明帝はより奢靡に傾斜した。重臣たちはたびたび諫言を呈し、特に高堂隆はその急先鋒であった。諸葛亮の陣歿した年は、盧毓が中央に戻って侍中を拜命した年でもある。彼もまた明帝の側にあつて批判し、高堂隆たちと軌を一にした。

侍中の高堂隆 數々宮室の事を以て切諫するに及んで、帝悦ばず。毓進みて曰く、「臣聞くならく、君明なれば則ち臣は直、古の聖王は其の過ちを聞かざるを恐るるが故に、敢て諫むの鼓有り。近臣の規を盡くすは、此れ乃ち臣らの隆に及ばざる所以なり。隆が諸生、名づけて狂直と爲す。陛下宜しく之を容るるべし」と（『三國志』卷二十二 盧毓傳。⁽⁴⁶⁾

口うるさい高堂隆を疎ましく思う明帝に對し、盧毓は高堂隆のようにはばかりことなく諫言を呈する「狂直」な人物の重要性を説き、彼の主張を後押ししている。こうして侍中を三年務めたのち、景初元（二三七）年には人事を管掌する吏部尙書に任ぜられた。明帝の死の二年前のことであつた。

上述のごとく、盧毓は崔琰に評價されて「北海グループ」の一人となり、曹魏において頭角を現した。やがて、曹操が漢魏革命の準備を整える中で文學を宣揚し、儒教官僚を彈壓するようになって、盧毓は儒教を第一に据えていく。その學知は曹操をうならせて政治に反映させるだけにとどまらず、太守として地方を治める中でも實踐されたのである。それは同じように實踐を重視した父盧植の生き方を繼承するものと言つてよい。

四 人事の管掌と司馬氏

漢魏交代期は人事運用における大きな轉換期であつた。遡れば、後漢後半期より郷舉里選が正しく機能しなくなり、黨錮の禁を惹起した結果、人物評價が流行するに至る。その後、孔融と陳羣が汝南・潁川人士の優劣をめぐり論争を展開したのを好例として、個人に對する評價は地域を絡めたものへと發展した。⁽⁴⁷⁾ ついには地域の名聲に基づく人物登用制度、すなわち九品中正制度が導入されることは周知に屬する事柄であろう。しかし、九品中正制度の導入は強力な人事權を中正官に持たせることとなり、やがて家格の固定へと繋がる。西晉の劉毅が残した「上品に寒賤無く、下品に勢族無し」(『晉書』卷四十五 劉毅傳) という有名な文言は、その運用が恣意的であつたことを物語る。九品中正制度のような名聲に基づく人事は、君主側の警戒するところとなつた。

盧毓が初めて人事を扱う官職に就いたのは、曹操期のことであつた。當時は吏部郎という立場であり、註(7)所掲蔣森論文は、崔琰・毛玠・徐奕・桓階らの下で盧毓が選舉の實施に携わつたことを推測する。その後、地方の太守を務め、明帝期に中央に戻り、吏部尙書に就いたのは前述のとおりである。

明帝は名聲に基づく人事に強い警戒感を示していた。⁽⁴⁸⁾『三國志』卷三十二 盧毓傳に、⁽⁴⁹⁾

此れより前、諸葛誕・鄧颺ら名譽を馳せ、四聰八達の誦有り、帝之を疾む。時に中書郎を擧げ、詔して曰く、「其の人の與否を得るは、盧生に在る耳。選舉するに名有るを取る莫かれ。名は地に畫きて餅を作るが如く、啖ふ可からざるなり」と。毓對へて曰く、「名は以て異人を致すに足らず、而れども以て常士を得可し。常士は教へを畏れ善を慕ひ、然る後に名有り、當に疾むべき所に非ざるなり。愚臣 既に以て異人を識るに足らず、又た主者は正に名に循ひ常を案ずるを以て職と爲し、但だ當に以て其の後を驗すること有るべし。故に古者は敷奏するに言を以てし、明らかに試みるに功を以てす。今、考績の法は廢れ、而して毀譽を以て相ひ進退す。故に眞僞渾雜し、虛實相ひ蒙す」と。

とある。當時、明帝は知識人層の間で相互に行われていた人物評價を嫌惡し、彼らを「浮華」の徒として斥ける。そして「名有るを取る莫かれ」と言い放ち、人事の可否が盧毓にあるという詔をわざわざ下したうえで、名聲を「畫餅」と切り捨てたのである。しかし、明帝の意に反して、盧毓は才能よりも名聲重視の立場をとった。名聲に基づいて登用すれば、飛び抜けた能力のある「異人」を得るには足りぬが、一定水準の能力を持つ「常士」は得られるという。これはかつて曹操が掲げた「唯才主義」とは對照的と言えよう。盧毓は曹魏に仕えて人事を管掌しながら、政權創始者たる曹操の理念をはっきり否定したのである。⁽⁵⁰⁾

かかる立場をとる盧毓は、いかなる人物を推舉したのであろうか。その人選を君主側はどう受け止めたのであろうか。盧毓の人選に關しては本傳に二つの事例がある。それを手がかりに見ていきたい。まずは、侍中から吏部尙書に遷った時のことである。明帝は後任の侍中を盧毓自身に選べせた。

（盧）毓をして自ら代を選ばしめて曰く、「卿の如き者を得れば乃ち可なり」と。毓常侍の鄭沖を舉ぐ。帝曰く、「文和は吾れ自ら之を知れり。更めて吾の未だ聞かざる所の者を舉げよ」と。乃ち阮武・孫邕を舉ぐ。帝是に於て邕を用ふ。（『三國志』卷二十二 盧毓傳）⁽⁵¹⁾

鄭沖は滎陽郡開封の人で、經史に耽溺し、儒術に通じた人物である。⁽⁵²⁾曹爽の幕僚となるが、西晉建國の功臣となったことから、司馬氏とも近しい立場にあったと見てよい（『晉書』卷三十三 鄭沖傳）。盧毓はまずこの鄭沖を舉げるも、明帝に拒否されたため、改めて阮武・孫邕の二人を推した。両者は史書に專傳を持たず、詳しい事蹟は不明だが、阮武は陳留郡の人で、父阮諶は『三禮圖』を著した儒者であった。阮武も廣い才能と學識を持ち、清河太守を務めたという⁽⁵³⁾（『三國志』卷十六 杜畿傳附杜恕傳・同傳注引『杜氏新書』・同傳注引『阮氏譜』）。おそらく阮瑀・阮籍らの同族であろう。孫邕は陳留太守を務め、鄭沖・曹羲・荀顗・何晏らとともに『論語集解』の編纂に携わっている（『晉書』卷三十三 鄭沖傳）。盧毓の推薦に對し、明帝は孫邕を採用した。ここで挙げられた三者はいずれも儒家的教養を根底に持つっており、ここに盧毓の人事の方

向性を理解できる。

もう一つの事例として、『三國志』卷二十二 盧毓傳に、⁽⁵⁴⁾

會々司徒缺け、毓處士の管寧を擧ぐるも、帝用ふる能はず。更めて其の次を問ふに、毓對へて曰く、「敦篤至行なれば、則ち太中大夫の韓暨。亮直清方なれば、則ち司隸校尉の崔林。貞固純粹なれば、則ち太常の常林」と。帝乃ち暨を用ふ。

とある。司徒に缺員が出た際、盧毓は管寧を推舉し、ついで三人の名を擧げた。管寧は邴原・華歆らと齊名であり、品行の高潔さを稱えられた。さらに『詩』『書』に通じ、禮をわきまえた人物でもある（『三國志』卷十一 管寧傳・同傳注引『傳子』）。有徳の儒者として名聲を博したのが管寧であつた。しかし、明帝は彼を登用しなかつたため、盧毓は次點の三人を推す。それが「敦篤至行」の韓暨、「亮直清方」の崔林、「貞固純粹」の常林であつた。彼らの評語について、註(7)所掲葭森論文は、すべて飾り氣のないまっすぐな性格や行動を擧げており、合わせて盧毓がこの四字句の評語に九品中正の「狀」を踏まえていた可能性を示唆する。⁽⁵⁵⁾首肯し得る見解である。

韓暨は、父と兄を陥れた仇敵を倒したことで名を擧げ、孝廉に察舉された人物である（『三國志』卷二十四 韓暨傳）。崔林は、崔琰の從弟であり、縣長時代にすぐれた徳治を擧げたことで拔擢された（『三國志』卷二十四 崔林傳）。常林は、貧家の出身であつたが、苦勞して太學に入り、經典を修めた人物である。のちに彼は「郷邑の耆徳」となつたため、同郷の司馬懿から常に拜されたという（『三國志』卷二十三 常林傳）。

このように、盧毓は一人の例外もなく儒教的性行に基づいて人物を推薦した。必要なのは飛び抜けた才能ではない。曹操や吳質のような文學のセンスでもない。明帝が儒教官僚層の閉鎖的な人物評價を嫌惡しようとも、重視すべきは儒教であり、その理念に基づく名聲であり、その實踐の有無であつた。⁽⁵⁶⁾また、この人物推薦からは別のことも浮かび上がる。盧毓の擧げた四人のうち、管寧・崔林は「北海グループ」に屬し、常林は司馬懿と同郡で關係の深い人物であつた。眞つ先

に「北海グループ」の管寧を推すところは、政治性および黨派性の表れであろう。對する明帝は韓暨を選択した。韓暨は荊州南陽郡を本貫とし、この四者の中では「北海グループ」や司馬懿からもっとも縁遠い人物と言える。如上の人事は明帝期末のことであり、明帝は盧毓に人事を預けながらも、盧毓と交流があり、「朝廷の望なり。社稷は未だ知らず」（『三國志』卷二十二陳矯傳注引『世語』）と評された司馬懿を含めて、その與黨に對する潜在的な警戒心を抱いていたと考え得るのである。

かくして、吏部尚書として人事を管掌した盧毓であつたが、明帝の死とともに事態が動く。延熙二（二三九）年、三代の若さで病に倒れた明帝は、幼い曹芳のことを憂慮し、やむなく曹爽と司馬懿に後事を託して崩じた。ここから曹爽を中心とする帝室派と、司馬懿を中心とする儒教官僚派との權力闘争が激化する。曹爽は何晏・夏侯玄・丁謐ら曹氏に縁ある者を側近として登用するとともに、司馬懿を太傅に祭りあげて政治の實權を奪う。また明帝が嫌つた「浮華」の徒らを糾合して反司馬氏勢力を固めた。さらに勢力を擴大すべく、多くの人物を辟召して幕僚を構成する。⁽⁵⁷⁾

かかる闘争の過程で盧毓は吏部尚書の地位を追われた。後任として就いたのは何晏であつた。何晏は玄學の創始者として知られる。⁽⁵⁸⁾ 玄學を價值基準の中心に据えることで、儒教的價值基準による人事に對抗したのである。何晏が吏部尚書に就いている以上、必然的に玄學の價值は高まつていく。實際、司馬懿の子の司馬師ですら玄學に基づく評價を受けている（『三國志』卷九 曹眞傳附曹爽傳注引『魏氏春秋』）。こうした中で何晏とともに曹爽に與していた夏侯玄は、九品中正制度のあり方を批判する。『三國志』卷九 夏侯玄傳に、⁽⁵⁹⁾

夫れ才を官し人を用ふるは、國の柄なり。故に銓衡をば臺閣に専らにするは、上の分なり。孝行は閭巷に存し、優劣をば之を郷人に任せるは、下の敍なり。夫れ敎を清くし選を審かにせんと欲すれば、其の分敍を明らかにし、相ひ渉らしめざるに在る而已。……州郡の中正の品もて官才を度りて自り之來、年載有り、緬緬紛紛として、未だ整齊を聞かざるは、豈に分敍參錯し、各々其の要の由る所を失ひしに非ざるや。……奚ぞ必ずしも中正をして銓衡の機を下

に干め、而して機柄を執る者をして委仗する所上に有らしめ、上下交々侵し、以て紛錯を生ぜしめんや。……中正は則ち唯だ其の行迹を考して、其の高下を別ち、審らかに輩類を定むるのみにして、升降せしむる勿かれ。……。

とある。全文は極めて長いため一部省略したが、この議の内容で最も重要な點は、人事權の選考を臺閣、すなわち尙書に集中させることにある。皇帝直屬の尙書が人事を掌握すれば、君主權力の強化に繋がる。曹爽一派は曹氏による中央集權體制の強化を圖り、また九品中正制度によつて名族たちに奪われた人事權を曹氏のもとに取り返そうとした。これに對し、司馬懿は州大中正制を提唱して名族たちの支持を取り付け、曹爽と對峙する。⁽⁶⁰⁾

兩者の勝敗が決したのは、正始十（二四九）年のことであつた。司馬懿は曹爽が洛陽を離れた隙についてクーデターを起し、實權を掌握した。この正始の政變により曹爽兄弟や何晏らは殺害され、司馬懿は空席となつた吏部尙書に再び盧毓を就けたのである。司馬氏の專横が始まつてからしばらくして、盧毓は尙書僕射に轉じ、引き讀き官僚選拔に當つた。儒者たることを第一に生きた盧毓を司馬氏は評價し、盧毓もまたその期待に應えたと言えよう。司馬氏からの信頼は厚く、正元二（二五五）年に毌丘儉の叛亂が起つた際には、司馬師より後事の取りまとめを任されている。その後、盧毓は司空・容城侯となり、甘露二（二五七）年に歿した。文學・玄學という文化的價値の擡頭した後漢末より曹魏にあつて、盧毓は純儒として生涯を全うしたのである。なお、盧毓には二子があり、兄の盧欽は吏部尙書に就いて人事を擔當し、弟の盧珽は衛尉卿を務めた。盧珽の子の盧志は成都王穎の軍師となり、盧志の子の盧諶は榮陽公主（武帝司馬炎の娘）を娶る（『晉書』卷四十四 盧欽傳・盧珽傳・盧志傳・盧諶傳）。西晉司馬氏政權の中で盧氏は司馬氏との紐帶を強め、擡頭していく。その道筋は、盧植から盧毓の代にかけてできあがつたものである。

おわりに

西周時代の齊の公族を遠祖に持つとされる盧氏は、後漢の盧植の代で大きく飛躍した。盧植は若年時より研鑽を積み、

磨きあげたその學知を机上の空論とせず、現實の政治へと生かすべく、常に實踐を志したのである。著書『禮記解詁』はその成果の一つであった。儒教を修め、將としての能力を合わせ持つ彼は、四府からの評價を受け、夷狄や黃巾討伐を行った。結果、盧植の聲望は、學究に生涯を費やした友人の鄭玄を凌ぎ、ついには「大儒」「儒宗」として海内に名を轟かせるに至る。死ぬ直前まで實踐の場に居續けたその意思と行動力こそが盧植の本性であり、死後も顯彰されたのである。かかる生き方は盧毓に受け繼がれた。曹魏政權に仕えた盧毓は、「北海グループ」の崔琰に評價されて擡頭の機會を得る。折しも曹操は文學を重視し、自身を認めてくれた崔琰をはじめとする儒教官僚を彈壓していくが、盧毓は動搖することなく儒者として歩む。結果、彈壓されることなく卻って重んぜられ、「儒」の象徴とも言える立場を政權内で築いたのである。その後、文帝期を経て、明帝期に入ると、吏部尚書として人事を管掌するに至った。そこでの盧毓はやはり儒教理念を基準とする人事を前面に押し出していく。だが、明帝の死後、自らの與する司馬懿と反司馬氏勢力を糾合する曹爽との間で權力鬭争が起ると、地位を追われた。儒教に對抗するために玄學を掲げる文化的潮流にあっても、盧毓は儒者であり續けた。換言すれば、曹魏政權で重視された價值觀を盡く否定してきたのである。それが盧毓という人物であった。漢魏交代期から西晉にかけては、政權だけでなく文化のあり方も變化した時期である。文學を宣揚した曹操と、玄學を宣揚した曹爽は、言わば漢代から續く儒教という枠組みに敢然と挑戦するものであった。しかし、どちらも儒教を打破しきれず、むしろ儒教はそのまま正統教學の地位を保ち續ける。盧毓の死から八年後に建國される西晉は、後漢と同様、政策に儒教理念を持つ國家であった。⁶³ 盧植・盧毓の二代にわたって築いた「儒」の道はそこに合致し、子孫以降も盧氏の基軸として繼承されていったのである。

註

(1) 愛宕元「唐代范陽盧氏研究——婚姻關係を中心——」(『中國貴族制社會の研究』、京都大學人文科學研究所、一九八七年)。この論考は、貴族制の衰退・没落期と見なされる唐代後半期の、范陽盧氏を中心とした婚姻關係の實體を考察している。

(2) 盧氏出自姜姓。齊文公公子高、高孫侯爲齊正卿、諡曰敬仲、食采於盧、濟北盧縣是也。其後因以爲氏。田和篡齊、盧氏散居燕・秦之間。秦有博士敖、子孫家于涿水之上、遂爲范陽涿人。裔孫植、字子幹、漢北中郎將。生毓、字子象、魏司空・容城成侯。三子、欽・簡・斑。欽、晉尚書僕射。斑字子笏、晉侍中尚書・廣燕穆子。三子、浮・皓・志。志字子道、晉中書監・衛尉卿。三子、謏・詵。謏字子諒、晉侍中・中書監。……(『新唐書』卷七十三宰相世系表三上)。

(3) 『史記』卷三十二齊太公世家に、「小白母、衛女也。有寵於釐公。小白自少好善大夫高侯。及雍林人殺無知、議立君、高・國先陰召小白於莒。魯聞無知死、亦發兵送公子糾而使管仲別將兵遮莒道、射中小白帶鉤。小白詳死、管仲使人馳報魯。魯送糾者行益遲、六日至齊、則小白已入、高侯立之、是爲桓公」とあり、その『集解』に、「賈逵曰、齊正卿高敬仲也」とある。

(4) 『淮南子』道應篇に、「盧敖游乎北海、經乎太陰、入乎玄闕、至於蒙穀之上。見一士焉、深目而玄鬢、淚注而鳶肩、

豐上而殺下。軒軒然方迎風而舞。顧見盧敖、慢然下其臂、遁逃乎碑。盧敖就而視之、方倦龜殼而食蛤梨。……」とある。その他、『三國志』卷四十二郤正傳引『釋譏』の中にも名が見える。

(5) 杉浦豐治「盧植と鄭玄——禮記注をめぐって」(『金城學院大學國文學會』一六、一九七〇年三月)、池田秀三「盧植とその『禮記解詁』(上)(下)」(『京都大學文學部研究紀要』二九・三〇、一九九〇年三月・一九九一年三月)、潘斌「盧植《禮記解詁》探微」(『青海社會科學』二〇〇七・三、二〇〇七年五月)。三者は鄭玄の『禮記』注と比較した上でその特徴を論じている。

(6) 註(1)所掲愛宕論文は、「唐代范陽盧氏が自らの家系を言う場合、多くは後漢末の盧植を遠祖として言及することは、盧氏關係の墓誌を見れば、枚舉にいとまのない程見出せる」と述べる。

(7) 一例を挙げれば、葭森健介「六朝貴族制形成期の吏部官僚——漢魏革命から魏晉革命に至る政治動向と吏部人事」(『中國中世史研究續編』、京都大學學術出版會、一九九五年)は、吏部の人事と貴族制との關わりを論ずる中で、曹魏政權末期に吏部尚書となった盧毓と何晏の對立を考察している。

(8) 少與鄭玄俱事馬融、能通古今學、好研精而不守章句。融外戚豪家、多列女倡歌舞於前。植侍講積年、未嘗轉眄、融

以是敬之。學終辭歸、闔門教授。性剛毅有大節、常懷濟世志、不好辭賦、能飲酒一石（『後漢書』列傳五十四 盧植傳）。

(9) 『後漢書』列傳二十五 鄭玄傳に、「以山東無足問者、乃西入關、因涿郡盧植、事扶風馬融。融門徒四百餘人、升堂進者五十餘生」とあり、馬融門下には四百餘人の門弟があり、そのうちの五十餘人が高弟であつた。ちなみに、ここで鄭玄は盧植のつてを頼り馬融門下に入つてゐる。註(5)所掲池田論文は、馬融門下の高弟となつた盧植が入門した鄭玄に教示したであろうことを推測する。

(10) 盧植は『尚書章句』を著しており、章句にまったく拘泥しなかつたわけではない。また、本稿第二節でも言及しているように、註(5)所掲池田論文は、盧植『禮記解詁』の特徴として、「基本的には綿密に文字の訓詁を與えた書物を丁寧の説明した注釋書、つまりいわゆる訓詁名物としての注であつた」と述べている。

(11) 『後漢書』列傳十八上 桓譚傳に、「博學多通、徧習五經、皆詁訓大義、不爲章句」とあり、列傳三十下 班彪傳附班固傳に、「所學無常師、不爲章句、舉大義而已」とあり、列傳三十九 王充傳に、「好博覽而不守章句」とある。かかる傾向について、加賀榮治『中國古典解釋史——魏晉篇——』（勁草書房、一九六四年）は、訓詁を通じ、大義を通じ、理を辨ずることに主眼を置き、煩瑣解釋學の否定であつたと指摘する。

(12) 盧植と鄭玄はともに馬融の弟子であつたが、『太平御覽』

卷五百八十九 文部五 碑引『述征記』に、「下相城西北漢太尉陳球墓有三碑、近墓一碑記弟子盧植・鄭玄・管寧・華歆等六十人」とあり、太尉陳球のもとでも同門であつたという記述がある。王利器『鄭康成年譜』（齊魯書社、一九八三年）は、鄭玄が陳球に師事した年を建和二（二四八）年頃と推定しており、註(5)所掲池田論文もこの頃に兩者が知り合つたと推測する。

(13) 植聞、①鑿有不恤緯之事、漆室有倚檻之戚、②憂深思遠、君子之情。③夫士立爭友、④義貴切磋。⑤書陳謀及庶人。⑥詩詠詢于芻蕘。植誦先王之書久矣、敢愛其瞽言哉。今足下之於漢朝、猶旦、爽之在周室、建立聖主、四海有繫。論者以爲吾子之功、於斯爲重。天下聚目而視、攢耳而聽、謂準之前事、將有景風之祚。⑦尋春秋之義、王后無嗣、擇立親長、年均以德、德均則決之下筮。今同宗相後、披圖案牒、以次建之、何動之有。⑧豈橫叨天功以爲己力乎。宜辭大賞、以全身名。又比世祚不競、仍外求嗣、可謂危矣。而四方未寧、盜賊伺隙、恆獄、勃碣、特多姦盜、⑨將有楚人魯比、⑩尹氏立朝之變。宜依古禮、置諸子之官、徵王侯愛子、宗室賢才、外崇訓道之義、內息貪利之心、簡其良能、隨用爵之、彊幹弱枝之道也（『後漢書』列傳五十四 盧植傳）。

(14) 註(5)所掲池田論文によれば、「彊幹弱枝」は本來今文派の政治思想用語であつたが、後漢では外戚擁護の立場に立つ公羊今文派に對して、君主の絕對權を主張する左氏古文派の唱えるスローガンであるとする。

(15) 中平元年、黃巾賊起、四府舉植、拜北中郎將・持節、以護烏桓中郎將宗員副、將北軍五校士、發天下諸郡兵征之。連戰破賊帥張角、斬獲萬餘人。角等走保廣宗。植築圍壘、造作雲梯、垂當拔之。帝遣小黃門左豐詣軍觀賊形勢、或勸植以賂送豐、植不肯。豐還言於帝曰、廣宗賊易破耳。盧中郎固壘息軍、以待天誅。帝怒、遂檻車徵植、減死罪一等。〔後漢書〕列傳五十四 盧植傳。

(16) 張讓・段珪等困迫、遂將帝與陳留王數十人步出穀門、奔小平津。公卿竝出平樂觀、無得從者、唯尚書 盧植夜馳河上、王允遣河南中部掾閔貢隨植後。貢至、手劒斬數人、餘皆投河而死。〔後漢書〕列傳五十九 何進傳。

(17) 又議郎彭伯諫卓曰、盧尚書海內大儒、人之望也。今先害之、天下震怖。卓乃止、但免植官而已。〔後漢書〕列傳五十四 盧植傳。

(18) 『三國志』卷六 袁紹傳に、「袁紹字本初、汝南汝陽人也。高祖父安、爲漢司徒。自安以下四世居三公位、由是勢傾天下。紹有姿貌威容、能折節下士、士多附之、太祖少與交焉」とある。汝南郡を本貫とする袁氏は、袁安が司徒に就いてより以下、袁敞(司空)、袁湯(太尉・司空・司徒)、袁逢(太尉・司空)、袁隗(司徒・太尉)というように、三公を續けて輩出した。また、『後漢紀』卷二十六 獻帝紀に見える董卓の發言に、「但殺二袁兒、則天下自服矣」とあり、後漢末の天下の勢は、袁紹と從兄弟の袁術を中心、山崎光洋「後漢時代の汝南の袁氏について」(『立正史學』

五三、一九八三年三月)を参照。

(19) 瓚統内外、衣冠子弟有材秀者、必抑使困在窮苦之地。或問其故。答曰、今取衣冠家子弟及善士富貴之、皆自以爲職當得之、不謝人善也。所寵遇驕恣者、類多庸兒、若故卜數師劉緯臺、販繒李移子、賈人樂何當等三人、與之定兄弟之誓、自號爲伯、謂三人者爲仲叔季、富皆巨億、或取其女以配己子、常稱古者曲周・灌嬰之屬以譬也。〔三國志〕卷八 公孫瓚傳注引『英雄記』。

(20) 『三國志』卷八 公孫瓚傳に、「公孫瓚字伯珪、遼西令支人也。爲郡門下書佐。有姿儀、大音聲、侯太守器之、以女妻焉。遣詣涿郡盧植讀經」とある。また、『三國志』卷三十二 先主傳に、「(劉備)年十五、母使行學、與同宗劉德然・遼西公孫瓚俱事故九江太守同郡盧植」とあり、公孫瓚の他に劉備もまた盧植のもとで學んでいる。なお、盧植が公孫瓚たちを教授したのは、九江太守を辭してから盧江太守に就くまでの間と考えられる。

(21) 臣少從通儒故南郡太守馬融受古學、頗知今之禮記特多同穴。臣前以周禮諸經、發起訛謬、敢率愚淺、爲之解詁、而家乏、無力供繕寫上。……〔後漢書〕列傳五十四 盧植傳。

(22) 盧植の『禮記解詁』は、馬國翰『玉函山房輯佚書』や王謨『漢魏遺書鈔』などに收められている。また、何希淳『禮記正義引佚書考』(嘉新水泥公司文化基金會叢書、一九六六年)と葉程義『禮記正義引書考』(義聲出版社、一九八一年)は、『禮記正義』中に引用される散逸した注釋を

輯佚しており、その中で盧植の『禮記』注がまとめられている。就中、葉程義の著書は鄭玄注とも對比させてあり、差異が非常に分かりやすい。

- (23) 悪名高い董卓に仕えてでも實踐をめざした蔡邕や、『昌言』を著して漢滅亡後の新たな王朝で政治手腕を振るおうとした仲長統など、後漢末の實踐を重視する風潮は盧植以外にもたびたび見られるものであった。蔡邕については、丹羽兒子「蔡邕傳おぼえがき」（『名古屋大學文學部研究論集』五六、一九七二年三月）、福井重雅「蔡邕と『獨斷』」（『史觀』一〇七、一九八二年十月）などを参照。仲長統については、堀池信夫「仲長統について」（『中國文化』四三、一九八五年六月）／「仲長統論」と改題して『漢魏思想史研究』、明治書院、一九八八年に所収、内山俊彦「仲長統——後漢末知識人の思想と行動——」（『日本中國學會報』三六、一九八四年十月）／『中國古代思想史における自然認識』、創文社、一九八七年に所収）などを参照。

- (24) 『後漢書』列傳二十五 鄭玄傳に、「時大將軍袁紹、總兵冀州、遣使要玄。大會賓客、玄最後至、乃延升上坐。身長八尺、飲酒一斛、秀眉明目、容儀溫偉。紹客多豪俊、竝有才說。見玄儒者、未以通人許之、競設異端。百家互起。玄依方辯對、咸出問表。皆得所未聞、莫不嗟服」とある。一方、『三國志』卷六 袁紹傳注引『九州春秋』には、「（袁）紹延徵北海鄭玄而不禮」とあり、鄭玄を招いておきながら禮遇しなかったという記録もある。

- (25) 五年春、夢孔子。告之曰、起、起、今年歲在辰、來年歲

在巳。既寤、以讖合之、知命當終、有頃寢疾。時袁紹與曹操相拒於官度、令其子譚遣使逼玄隨軍。不得已、載病到元城縣、疾篤不進、其年六月卒（『後漢書』列傳二十五 鄭玄傳）。

- (26) 鄭玄の研究については枚舉にいとまがないが、その學問的特徴を論じた近年の研究としては、張舜微『鄭學叢書』（華中師範大學出版社、二〇〇五年）、池田秀三「鄭學の特質」（『渡邊義浩編』『兩漢における易と三禮』、汲古書院、二〇〇六年）、王啓發・孫險峰「鄭玄『三禮注』とその思想的意義」（『渡邊義浩編』『兩漢における易と三禮』、汲古書院、二〇〇六年）、間嶋潤一「鄭玄と『周禮』——周の太平國家の構想——」（明治書院、二〇一〇年）などがある。
- (27) もちろん、鄭玄の名聲が低かったわけではない。黨錮解除時には大將軍の何進に招かれ、後將軍の袁隗からは侍中のポストを提示され、孔子の二十世孫の孔融からは敬意を表された。また數千人の弟子を持ち、齊・魯間では鄭學を宗とするほどであった。一方で、鄭玄の學問は煩瑣ゆえに譏られたり、袁紹とその客たちから輕んじられることもあった（『後漢書』列傳二十五 鄭玄傳）。すなわち、四府から二度も推薦を受け、常に學問の實踐を志していた「海内の大儒」たる盧植に比べて、鄭玄の名聲は相對的に劣っていたのである。

- (28) 『三國志』卷四 高貴鄉公紀注引『魏氏春秋』に、「小同諸司馬文王。文王有密疏、未之屏也。如廁還、謂之曰、卿見吾疏乎。對曰、否。文王猶疑而鳩之、卒」とある。なお、

字句に多少の異同があるものの、『後漢書』列傳二十五鄭玄傳の注にもこの逸話が引かれている。

(29) 『晉書』卷九十 良吏 魯芝傳によれば、曹爽處刑後に取られたてられ、使持節・領護匈奴中郎將・振威將軍・并州刺史となり、西晉建國後は侯爵の位に進んだ。また、曹爽の幕僚には盧植の孫の盧欽もいるが、もちろん殺害されていない。正始の政變における人的構成については、葦森健介

「魏晉革命前夜の政界——曹爽政權と州大中正設置問題——」（『史學雜誌』九五—、一九八六年一月）、伊藤敏雄「正始の政變をめぐる——曹爽政權の人的構成を中心に——」（『中國史における亂の構圖』、雄山閣出版、一九八六年）を参照。

(30) 司馬氏は代々儒教を修めてきた家柄であり、州大中正の制を提案して儒者を束ねる存在でもあった。その司馬氏に殺害されることに、小同への輕視ぶりが窺える。なお、儒者を殺害するという点では、例えば曹操も孔融を殺害しているが、この場合は對立する儒教官僚層への見せしめの効果を狙ったからこそ、孔子の末裔という典型的な「儒」のシンボルたる孔融を對象としたのであり、司馬氏の事例とは異なる。

(31) 太祖北征柳城、過涿郡、令告太守曰、故北中郎將盧植、名著海内、學爲儒宗、士之楷模、乃國之楨幹也。昔武王入殷、封商容之閭、鄭喪子產而仲尼隕涕。孤到此州、嘉其餘風。春秋之義、賢者之後、有異於人。敬遣丞掾脩墳墓、并致薄醴、以彰厥德（『三國志』卷二十二 盧毓傳注引『續漢書』）。

書」。

(32) 曹操の盧植顯彰には、袁紹麾下にいた華北出身の知識人層や儒教官僚の支持を自分に集めるという政治的思惑があったと推測される。一方で曹操は、董卓のもとであつても學問の實踐を圖つた蔡邕を評價していることから、かかる實踐型の人物に對して敬意を表するという個人的意思もあつたと見てよい。

(33) 川勝義雄「シナ中世貴族政治の成立について」（『史林』三三—四、一九五〇年八月）「貴族政治の成立」と改題・改訂し、『六朝貴族制社會の研究』、岩波書店、一九八二年に所收）は、青州北海を中心とした孔融・鄭玄らの知識人派閥を「北海グループ」と呼稱する。彼らは名聲を有し、門生・故吏の關係にあつた。このグループの人物には、鄭玄・孔融・王朗・華歆・邴原・王脩・管寧・國淵・崔琰・崔林・王基・盧毓らが屬する。なお川勝は、「濁流（＝宦官派）」に抵抗した「清流（＝黨人派）」という括りを「北海グループ」に適用するが、本稿では、「清流」という觀點を含まず、孔融・鄭玄ら北海中心の相互に關係を有する派閥という意味で「北海グループ」という文言を使用する。また、渡邊義浩『三國政權の構造と「名士」』（汲古書院、二〇〇四年）は、附表として三國政權の人的構成や「北海グループ」など知識人集團の交友關係を整理しており、こちらも参照。

(34) 涿郡孫禮・盧毓始入軍府、琰又名之曰、孫疏亮亢烈、剛簡能斷。盧清警明理、百鍊不消。皆公才也（『三國志』卷

十二 崔琰傳。

- (35) 崔琰は鄭玄の弟子となり、袁紹に仕えた。袁紹の死後は曹操に別駕從事として迎えらる。曹操の丞相就任後は、東曹および西曹掾屬を務め、人事を擔當した（『三國志』卷十二 崔琰傳）。「北海グループ」の中でも拔きこんでた人物と言える。唐長孺「東漢末期的大姓名士」（『中華學術論文集』、中華書局、一九八一年）は、袁氏滅亡後、崔琰が中心となつて冀州の名士に序列をつけ、曹魏政權に加入させたことを指摘する。

- (36) 司馬懿の妻となる張春華は、「河内の山氏」出身の母を持つ。これは、竹林の七賢の一人である山濤を輩出した家柄である（『晉書』卷三十一 張皇后傳）。司馬氏は郡内の豪族と姻戚關係を結んでいた。

- (37) 司馬懿が曹魏政權に仕えたのは、荀彧の推舉によるものである。荀彧は曹魏政權を支えた潁川郡出身の知識人集團「潁川グループ」の中心人物であつた。「潁川グループ」については、註(33)所掲川勝論文を参照。川勝は、荀氏・鍾氏・陳氏を中核とした潁川人士集團を「潁川グループ」と名付け、「北海グループ」と相互に密接に聯絡し、士大夫たちの指導的役割を果たすものと述べる。司馬懿はその兩グループから評價されるほどの人物であつた。盧毓と司馬懿の交流もかかる人的關係の中で生じたのであろう。

- (38) 岡村繁「建安文壇への視角」（『中國中世文學研究』五、一九六六年六月）。

- (39) 渡邊義浩「三國時代における「文學」の政治的宣

揚——六朝貴族制形成史の視點から——」（『東洋史研究』五四—三、一九九五年十二月）、「文學」の宣揚」と改題して、『三國政權の構造と「名士」』、汲古書院、二〇〇四年に所収。さらに改訂して「曹操の「文學」宣揚」と改題し、『古典中國』における文學と儒教、汲古書院、二〇一五年に所収）。

- (40) 建安文學の特徴については多くの論考・著書があり、例として、鈴木修次『漢魏詩の研究』（大修館書店、一九六七年）、松本幸男『魏晉詩壇の研究』（朋友書店、一九七七年）、李寶均『曹氏父子和建安文學』（上海古籍出版社、一九七八年）、福山泰男『建安文學の研究』（汲古書院、二〇一二年）などがある。

- (41) 曹操は建安十五（二二〇）年・建安十九（二二四）年・建安二十二（二二七）年の三回にわたつて「唯才主義」を布告し、才能さえあれば性行を問わぬ方針を打ち出した。これは漢代の儒教理念に基づく察舉、鄉舉里選の否定である。合わせて、第一回の二年前に孔融を、第二回の二年前に荀彧を、第三回の前年に崔琰を、それぞれ死に追いつている。また、彼ら以外にも殺害・失脚させた儒教官僚があり、ここに儒教的價值觀の超克を圖る曹操の姿を窺うことができる。その一環が文學の宣揚であつた。註(39)所掲渡邊論文も参照。

- (42) 吳質は儒教を價值の第一に置かず、貴戚に取り入つて高位に就き、また「潁川グループ」を代表する司空の陳羣を攻撃したこともあつたため、知識人層からの評判が悪く、

「士名」を與えられず、同郷の董昭に愚痴をこぼしている。その後、庇護者の曹丕が死ぬと吳質は排斥され、死後に「醜侯」という諡號を贈られた。子の吳應が取りなしを頼み、ようやく改められるに至る（『三國志』卷二十一 王粲傳附吳質傳・同傳注）。なお、吳應は尚書となり、吳質の孫の吳康は大位に至った。六世孫の吳隱之中書侍郎・國子博士・太子右衛率・轉散騎常侍・領著作郎を務め、龍驤將軍・廣州刺史などを歴任し、死後に左光祿大夫を追贈され、散騎常侍を加えられる。吳隱之の子の吳延之は鄱陽太守に至った（『晉書』卷九十 良吏・吳隱之傳）。單家出身かつ儒教を尊重しなかった吳質の子孫は、魏晉南北朝を経て一定の家格を築く。なお、吳質と曹丕の關わりは、松本幸男「曹丕と吳質——曹丕の評論活動の契機——」（『立命館文學』三五八・三五九合併號、一九七五年五月／『魏晉詩壇の研究』、朋友書店、一九七七年所收）を參照。

(43) 時天下草創、多遁逃、故重士亡法、罪及妻子。亡士妻白等、始適夫家數日、未與夫相見、大理奏棄市。毓駁之曰、夫女子之情、以接見而思生、成婦而義重。①故詩云、未見君子、我心傷悲。亦既見止、我心則夷。②又禮、未廟見之婦而死、歸葬女氏之黨、以未成婦也。今白等生有未見之悲、死有非婦之痛、而吏議欲肆之大辟、則若同牢合卺之後、罪何所加。③且記曰、附從輕、言附人之罪、以輕者爲比也。④又書云、與其殺不辜、寧失不經、恐過重也。苟以白等皆受禮聘、已入門庭、刑之爲可、殺之爲重。太祖曰、毓執之是也。又引經典有意、使孤歎息。由是爲丞相法

曹議令史、轉西曹議令史（『三國志』卷二十一 盧毓傳）。なお、④は『左傳』襄公二十六年に、「夏書曰、與其殺不辜、寧失不經」とあり、もとは『尚書』からの引用と見られる。しかし、杜預は「逸書也」と注を附し、當該文も『尚書』大禹謨篇（僞古文）にのみ見えることから、ここは『左傳』を典據と見なす。

(44) 魏國既建、爲吏部郎。文帝踐阼、徙黃門侍郎、出爲濟陰相、梁、譙二郡太守。帝以譙舊鄉、故大徙民充之、以爲屯田。而譙土地瘠瘠、百姓窮困、毓愍之、上表徙民於梁國就沃衍、失帝意。雖聽毓所表、心猶恨之、遂左遷毓。使將徙民爲睢陽典農校尉。毓心在利民、躬自臨視、擇居美田。百姓賴之。遷安平・廣平太守、所在有惠化（『三國志』卷二十二 盧毓傳）。

(45) 『三國志』卷三 明帝紀の評には、「而遽追秦皇・漢武、宮館是營、格之遠猷、其殆疾乎」とある。また、袁樞の『通鑑紀事本末』卷十は、「明帝奢靡」と題して宮殿造營などに對する臣下の諫奏をまとめている。明帝を諫めたのは、陳羣・高柔・蔣濟・王基・辛毗・楊阜・高堂隆・王肅・盧毓・司馬懿らなど多數にのぼる。明帝の宮殿造營については、渡邊信一郎「宮闕と園林——三・六世紀中國における皇帝權力の空間構成——」（『考古學研究』四七一・二二〇〇年九月／『中國古代の王權と天下秩序——日中比較史の視點から——』、校倉書房、二〇〇三年に所收）、福原啓昭「三國魏の明帝——奢靡の皇帝の實像——」（『古代文化』五二一・八、二〇〇〇年八月／『曹魏の明帝——奢

靡の皇帝の實像——と改題して、『魏晉政治社會史研究』、京都大學出版會、二〇一二年に所收、安田二郎・曹魏明帝の「宮室修治」をめぐる（『東方學』一一一、二〇〇六年一月）、佐川英治「「奢靡」と「狂直」——洛陽建設をめぐる魏の明帝と高堂隆」（『中國文史論叢』六、二〇一〇年三月）等の論考を参照。

(46) 『三國志』卷二十二 盧毓傳に、「及侍中高堂隆數以宮室事切諫、帝不悅、毓進曰、臣聞君明則臣直、古之聖王恐不聞其過、故有敢諫之鼓。近臣盡規、此乃臣等所以不及隆。隆諸生、名爲狂直、陛下宜容之」とある。また、高堂隆の明帝批判は、『三國志』卷二十五 高堂隆傳にも見える。

(47) 後漢末、孔融は陳羣と論争を行い、「汝穎優劣論」を著す。これは題名が表すように、汝南と潁川の人物批評であり、黨錮の禁以降に流行した個人單位の人物批評が郡單位に廣がっている點に特徴がある。かかる批評の發展は、曹魏政權後半期になると、何晏と盧毓の「冀州論」のような州單位の評價の登場を促した。孔融の「汝穎優劣論」については、勝村哲也「後漢における知識人の地方差と自律性」（『中國中世史研究——六朝隋唐の社會と文化——』、東海大學出版會、一九七〇年）および拙稿「孔融の人物評價」（『六朝學術學會報』一四、二〇一三年三月）を参照。

(48) もともと即位當初の明帝は、儒教に基づく人事を主張した。しかし、「奢靡」に努めて君主權力を強化する過程で、知識人層との間に龜裂を生じ、また彼らの相互評價と名聲の高めあいによる人事への影響を嫌惡するに至る（『三國

志』卷三 明帝紀）。

(49) 前此諸葛誕・鄧颺等馳名譽、有四聰八達之謂、帝疾之。時舉中書郎、詔曰、得其人與否、在盧生耳。選舉莫取有名。名如畫地作餅、不可啖也。毓對曰、名不足以致異人、而可以得常士。常士畏教慕善、然後有名、非所當疾也。愚臣既不足以識異人、又主者正以循名案常爲職、但當有以驗其後。故古者敷奏以言、明試以功。今考績之法廢、而以毀譽相進退、故眞僞渾雜、虛實相蒙（『三國志』卷二十二 盧毓傳）。

(50) 曹操の唯才主義を繼承していたのが、曹爽一派であった。曹爽派の李豐は、才と性が一致するか否かを「同」「異」「合」「離」の四つから論じる「才性四本論」に關わり、才と性を別物とする「異」「離」の立場をとった。また李豐は、盧毓に人事のあり方を尋ねたことがあり、才をさほど重視しない返答を受けるが、その時は一應納得している（『三國志』卷二十二 盧毓傳）。明帝の死後、曹爽が何晏を吏部尚書に就けたのも、彼らが盧毓を嫌ったためと言える。才と性を論じる傾向は、その後も山濤の「山公啓事」などへ繼承されていく。なお、「才性四本論」については、唐長孺「魏晉才性論的政治意義」（『魏晉南北朝史論叢』、生活・讀書・新知三聯書店、一九五五年）、岡村繁「才性四本論」の性格と成立——あわせて唐長孺氏の「魏晉才性論的政治意義」を駁す」（『名古屋大學文學部研究論集』二八、一九六二年三月）に詳しい。

(51) 使毓自選代曰、得如卿者乃可。毓舉常侍鄭沖。帝曰、文和吾自知之。更舉吾所未聞者。乃舉阮武・孫資。帝於是用

邕〔三國志〕卷二十二盧毓傳。

- (52) 『晉書』卷十四地理志上によれば、滎陽郡が置かれたのは泰始二（二六六）年のことである。鄭沖の出身縣の開封はもと河南郡に屬していた。河南は司州（司隸）に屬し、司馬氏の本貫たる河内の隣郡である。

- (53) 阮武が清河太守を務めた時期は不明だが、清河郡は、「北海グループ」に屬した崔琰・崔林ら崔氏の本貫である。阮武の太守時代、崔氏およびその縁者を通じて交流があったのかも知れない。

- (54) 會司徒缺、毓舉處士管寧、帝不能用。更問其次、毓對曰、敦篤至行、則太中大夫韓暨。亮直清方、則司隸校尉崔林。貞固純粹、則太常常林。帝乃用暨（『三國志』卷二十二盧毓傳）。

- (55) 叡森說に補足するならば、三人の評語のうち、「敦篤」は『春秋左氏傳』成公十三年、「貞固」「純粹」はともに『周易』乾卦の文言傳に見える文言である。この他、崔林の評語の「亮直」や、かつて高堂隆を評した「狂直」に見られる「直」もまた、儒教的價值觀に基づく評價と言える。本文で挙げたのは、もっぱら三人の若年時のことである。換言すれば、その頃から儒教の研鑽および實踐を積んだ人物と言える。また、韓暨は年八十にして司徒に任ぜられた際、その詔の中で、「太中大夫韓暨、澡身浴德、志節高契」と評されている。「澡身浴德」は『禮記』儒行篇を典據とする文言である。

- (57) 曹爽の幕僚については、註(29)所掲伊藤論文に詳しい。

それによれば、裴秀・王沈・王渾・荀勗・盧欽・王基・鄭沖・魯芝・羊敞・應璩・劉陶・王弼・賈充・朱整・羊祜・阮籍・孫禮・羊偉が加わっている。この人選について伊藤は、「その出自などをみると、壓倒的に、後漢末の名族・名士で表徴・辟召された（以爲も含む）官僚の子弟が多い。そしてその多くは學識・行德に優れ、とくに儒家的教養を備えている」と指摘する。

- (58) 何晏の思想については、福永光司「何晏の立場——その學問と政治理念」（『愛知學藝大學研究報告』人文科學七、一九五八年二月／『魏晉思想史研究』、岩波書店、二〇〇五年に所収）、福島吉彦「何晏研究——辯褒貶」（『山口大學文學會志』二三、一九七二年十月）、堀池信夫「何晏の思想」（『漢魏思想史研究』、明治書院、一九八八年）、室谷邦行「何晏の論理の基礎構造——『道論』『無名論』に基づいて」（『中國哲學』二五、一九九六年十月）、渡邊義浩「浮き草の貴公子 何晏」（『大久保隆郎教授退官記念漢意とは何か』、東方書店、二〇〇一年／『三國政權の構造と「名士」、汲古書院、二〇〇四年に所収）などを参照。

- (59) 夫官才用人、國之柄也。故銓衡專於臺閣、上之分也。孝行存乎閭巷、優劣任之鄉人、下之敘也。夫欲清教審選、在明其分敘、不使相涉而已。……自州郡中正品度官才之來、有年載矣、緬緬紛紛、未聞整齊、豈非分敘參錯、各失其要之所由哉。……奚必使中正干銓衡之機於下、而執機柄者有所委仗於上、上下交侵、以生紛錯哉。……中正則唯考其行迹、別其高下、審定輩類、勿使升降。……（『三國志』

卷九 夏侯尚傳附夏侯玄傳。

- (60) 註58 所掲渡邊論文は、司馬懿の州大中正制に對し、何晏が「冀州論」を著して司馬懿の出身地河内郡の含まれる冀州を攻撃したとする。これに對する反論として、冀州を辯護したものが盧毓の「冀州論」である。何晏の「冀州論」は、『太平御覽』卷四百四十七 人事部八十八 品藻下に、盧毓の「冀州論」は、『初學記』卷八 河東道 第四に引用されている。

- (61) 『晉書』卷四十四 盧欽傳によれば、盧欽は吏部尚書および尚書僕射に就いている。また同傳には、「欽舉必以材、

稱爲廉平」とあり、才能重視の推舉を行ったとされ、父盧毓とは異なる方針だったようである。

- (62) ただし、滎陽公主は盧諶との婚禮を行う直前に亡くなっている。

- (63) 西晉の諸政策と儒教の關係については、渡邊義浩『西晉「儒教國家」と貴族制（汲古書院、二〇一〇年）に詳しい。それによれば、西晉の政策は、封建・井田・學校を三本柱とし、『春秋左氏傳』や『禮記』を理念的根據に持つという。

appeared, the *inter-state* order influenced by the *Zhuhou* was re-established in the land of All under Heaven. But, at the same time, the Liu Bang government adopted the Qin system and continuously appointed *Hou* 侯 based on military-exploit ranks. Thus, *Fengjun* as *Zhuhou* as in the Warring States period and *Hou* based on the military-exploits ranks co-existed. Liu Bang who was enthroned as Emperor Gaozu was also recommended by *Zhuhou*.

Although Emperor Gaozu did not appoint *Hou* for a period after his enthronement, in the 12th month of the 6th year of his reign (201 B. C.), he appointed some members of his own clan as *Zhuhouwang* 諸侯王 and at the same time started to appoint retainers whose exploits were deserving as *Hou*. These appointments were to appoint deserving retainers, who had already been appointed as *Liehou* based on the military-exploit ranks, as *Zhuhou*. Thus, the *Liehou* of the Han era were instituted within in the twenty-rank system instituted in the Qin state but also had the characteristic of *Zhuhou*.

THE LU CLAN OF FANYANG : LU ZHI, LU YU IN THE POLITICS AND CULTURE OF THE TRANSITIONAL PERIOD FROM HAN TO WEI

TAKAHASHI Yasuhiro

Aristocratic clans prospered in Chinese history from the period spanning the Wei, Jin and the Northern and Southern dynasties to the Sui, Tang dynasties. The Lu clan of Fanyang was famous as representative of these clans during this period. It was Lu Zhi 盧植 who raised the reputation of the clan. This paper takes up Lu Zhi as the actual progenitor of Lu clan of Fanyang 范陽, which arose in the latter half of the Latter Han, and his son Lu Yu 盧毓, and it asks what was the foundation of Lu clan that allowed it to be transformed and rise to fame. It also analyzes the foundations of the Lu clan, surveys aspects of politics and culture, and offers a viewpoint of the process of the formation of the aristocracy through the lives of intellectuals in the period change from the Han to the Wei.

The rise of the Lu clan made great progress with Lu Zhi of the Latter Han. He studied Confucianism in his youth, and put his learning into practice in political administration. The *Liji Jiegu* 禮記解詁 is one result of these efforts. He was equipped with both Confucian learning and military leadership. As a result, he was admired by the *Sifu* 四府 (Four Chancellors). Therefore, he won greater fame

than Zheng Xuan 鄭玄 his comrade, who devoted his life to scholarship, and his reputation as a Confucian spread far and wide.

Lu Zhi's lifestyle was carried on by Lu Yu who served the Cao Wei government and was admired by Cui Yan 崔琰, providing him an opportunity to rise. Then, Cao Cao 曹操 overemphasized literature and oppressed Confucian bureaucrats such as Cui Yan. However, as Lu Yu stuck to his position as a Confucian, he was respected all the more in the Cao Wei government. During the reign of Emperor Ming, Lu Yu was appointed *Libu Shangshu* 吏部尚書 and managed personnel affairs based on Confucian principles. But after Emperor Ming's death, a power struggle between Sima Yi 司馬懿 and Cao Shuang 曹爽 ensued, and Xuanxue 玄學 which ran counter to Confucianism came into fashion in the culture. But Lu Yu again stuck to his position as a Confucian. In other words, Lu Yu consistently denied the dominant sense of values of the Cao Wei.

THE PEOPLE OF FORMER STATE OF KOGURYO AND SILLA : THE EAST ASIA SITUATION IN THE LATE 7TH CENTURY

INOUE Naoki

In 670 the people of the former state of Koguryo 高句麗 revolted against Tang 唐 with the support of Silla 新羅. Silla had been in conflict with Tang over the territory that had been controlled by Baekje 百濟. Therefore, Silla supported the people of the former Koguryo who revolted against Tang in order to stop Tang's large-scale military intervention. In this process, Keommujam 劍牟岑, from the former Koguryo state, invited Ansung 安勝, who was a son of the Koguryo minister Yongjaengto 淵淨土, to return from Silla and recommended him as their lord. But, Ansung killed Keommujam and escaped to Silla with 4,000 households from the former Koguryo. Silla recognized Ansung as the legitimate son of Koguryo's last king, appointed him as the king of Koguryo, and supported the people of the former Koguryo who resisted Tang.

In such circumstances, Silla supported the diplomacy of the people of the former Koguryo towards Japan. Because of conflict with Tang, Silla had to improve relations towards their former-enemy Japan and to prevent Japan from cooperating with Tang. Therefore, Silla used the people of the former Koguryo, who had maintained good relations with Japan before the state's downfall, and tried to obtain